仮面ライダーゼロノス　～スタート・ザ・ラブトレイン～

ダークボール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダーゼロノス　～スタート・ザ・ラブトレイン～

【Ｎコード】
Ｎ７８２８Ｐ

【作者名】
ダークボール

【あらすじ】
「俺はこの時間を守るライダーさ、世界中のな！」
成績は普通だけど家はボクシングジムで暴力家な青年、二神安里（ふたがみ あさと）。
タイトルマッチをかけた試合で事故を起こして腕を負傷、なんと二度とボクシングができなくなるとの診断が出されてしまう。
しかしそんな安里の前に謎の少女が現れてこう言った。
「その腕を治したかったら、私と契約してくれる？」

この時から安里の前に不思議なことが起きようとしていた…。

登場人物の紹介（前書き）

みなさーん！誕生秘話シリーズ第2弾へようこそ～！
第1弾を見てくれた人は感謝感激ですが、今回はとんでもないほどの仕上がりになっております！
ハッキしいうと自分、恋愛系には少し心配を持つものです。

何せこの作品のみ、何かとエロい（？）こともありうるからです。

ですがこれは自分の趣味ではありません！本当なんです！
ですから見てくれれば幸いでございますので、今回もよろしくお願いします！

登場人物の紹介

◇二神安里（ふたがみ　あさと）　男　１９歳
本作の主人公。高校３年生で科目の成績には特に問題ないのだが、生徒内では不良さえも根を上げる暴君野郎。
ボクシング部に入っており、成績はジュニアチャンプと滅法強い。
タイトルマッチをかけた試合で事故が発生して腕を負傷してしまうが、謎の少女と出会うことに…。

◇碧子（みどりこ）
入院中の安里の前に現れた少女。
完治する代わりに契約を求めにと安里に近づくが、その正体は未来から来た空想の怪物『イマジン』と名乗る者。
他者のイマジンを感知する能力を持つほか、人間（特に男性）に憑依すると髪の長い女性へと変わったりする。

◇清川（きよかわ）　涼音（すずね）　女　２７歳
安里のクラスの担任で、入学以来から安里のカウンセリングをしていた女性。
唯一かれの心を落ち着かせてくれたことに一目は相手から置かれているようであるが打ち解けられておらずに今後の動きを疑っている。
安里以外からは男子生徒に人気があるので、生徒側ではまさしく女神と言っている様子なのだがマイナス発言をさらっと言ってしまう小悪魔な一面があるのでそこが一番恐ろしい所。

◇ナディア・ルレイユ

碧子と同じく未来から来たイマジンで、彼女は悪魔を連想されたデビルイマジン。
若い男性の生気を吸い取って操らせる目的で悪事をたくらんでおり、性格ではロリコンな一面が多い。
炎を操る他、配下のイマジンを召喚する能力も持つので、イマジンの中で強力な魔力の持ち主である。

◇ティオナ・ルレイユ
ナディアの妹で、彼女は蜘蛛を連想されたスパイダーイマジン。姉のサポートを毎回行っており、隠密や戦闘を担当している。
分厚い鉄さえも切り裂く両手の爪が武器で、爪先から目では見えない蜘蛛糸や猛毒を操る能力を持つ。
なお、イマジンは本来怪物の姿をしているのだが、碧子、ナディア、ティオナは特殊な存在によって人間の姿をしており、あくまでもイマジンの中で強いというわけではない。

第1話「孤独な生徒」

子供のころ、皆さんは昔話を聞いたことはありますか？

知らないものは無いといわれる『桃太郎』や、意外と知らないとされている『わらしべ長者』など、子供にはとても人気ある話ばかりです。

では、もしそれが実際に目の前で姿を見せたらどう思いますか？

例え、それがあなたの知るものではないとしたら、どう思いますか…？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

とある高校にて――――。

「では、本日の授業はここまで！」

「起立！礼！」

授業が終わり、教師は教室から去って休み時間が始まる。

この教室では男子も女子も仲よくしながらで賑やかである。

だがそれを省かれるようにと、男子生徒１人だけが窓の外をじっと見つめていた。

読者の皆さんにはお察しの通り、彼が二神安里であるのだ。

「よぉ、安里」

そこへ他の男子生徒がやってくると、安里はしらけた目で向く。

「何だ」

「お前も少しは誰かと話したりしてみたらどうなんだいって、他の奴らも皆そう言ってるんだよ」

「女子からも少し気になってるって話だし、」

「お前の成績は悪くないんだけどさぁ、もう少し話してみたり…」

「うっせ、引っ込んでろバカ」

安里は冷たい一言だけで男子生徒を沈黙させてしまう。

すると皆で相談しあうように囲んで話し合いを始めた。

「何とかしてあげたいけど、どうする？」

「そっとしてもアイツには男子に与えられてる青春なんて迎えれるわけないしなぁ…」

「そうそう、アイツがもし彼女を作ったらうらやましく思わねぇか？」

「思う思う！絶対作れそうな顔してるし！」

「あと、家がボクシングジムだからカッコよく見えるし」

「まさに姫を守る王子様って「お前等…」

その直後、背筋が凍りつくようにして静まり返った直後に振り向けば安里が指ならしをして睨んでいた。

「俺が王子様なら、お前らは行く手を阻むモンスターってことだよ

な？」
「ヒ、ヒィィィィッ！？」

安里はモンスター（男子生徒）達に大きな声で吠えた！▼
モンスター達は安里に驚いて逃げて行った！▼

「ったく、1人くらいにさせろってよ…」

安里はまた外を眺め続けていると、次の授業が始まるチャイムが鳴るのであった。
そしてすべての科目が終わり、安里は部活へと足を運ぶ。

「安里、5日後に行われるタイトルマッチに出てもらうこととなった。相手は韓国出身の現役選手と聞いている」

安里が入るボクシング部には、より高度な練習が多く厳しい修羅場であり、コーチから安里へ試合の情報を報告される。
安里はジュニアリーグの現役チャンピオンで、これまでにとんでもない巨体で強いライバルを血を流しながら殴り倒している。

「これまで以上に強敵となるため、練習もそれ以上の厳しさになる。そのつもりでいてくれ」
「はい！」

コーチからの修羅特訓が始まり、安里は防衛戦に向けて拳を振るっ

ていった。

＝＝

その夜、人けの無い場所で小さな光がさ迷っていた。

人魂かと思いきや、光が増すと女の子へと変わる。

だがその子は普通ではない。

背中には蝙蝠の翼、服装は何かと露出があり、目は血のように真紅の色でいる。

まさに小悪魔と言っても過言ではない。

「ウフフ、この世界にはどんないい男がいるのかしら？」

女の子は翼を広げて空へ飛びあがる。

その直後、彼女が飛び去った場所からこの世とは思えるような怪物が地面から現れ、暗闇の中を歩き始めたのである。

そして最悪にも、その場所へ通りかかったサラリーマンの前に姿を見せる。

「うわぁっ！？　なんだぁ！！？？」

通り魔よりも怖い怪物にサラリーマンの腰が抜けてしまう。

「お前の望みを言え。何でも叶えてやる…ただし、」

代償はいただく…！

（つづく）

第2話「笑う門には絶望来る」

翌日、安里はいつも通りに登校している所だ。

「ハァ～、試合前だと厳しいったらありゃしない…」

安里は昨日の練習（4時間以上）に朝の5時から行うジョギングとで睡眠を取る時間が少ない。
だから授業中にアクビがでたりがあったりするのだが、これで成績に問題がないことに不思議がある。
校門を通り、自分の教室へ入ると、その前に来ていた生徒達が安里のもとに来る。

「おい安里、山下を見てなかったか？」
「あ？何のつもりだ？」

何か不安を持ってそうな様子で安里に問いかけてきたので、初めは邪魔と思いきっていた彼もその場で立ち止まる。

「山下君が今朝まで家に戻ってきてないって親が言ってたの。どうしたのか気になって…」
「携帯使っても繋がらないみたいだってさ」

だんだん雲行きが怪しくなった安里は、逆に質問を返しに出た。

「昨日最後に見たのは何時(いつ)だ？」
「たしか、6時だったよ。俺は山下と一緒に帰って、途中で別れるからそれで見たのが・・・」
「だとしたらその時に何かにあったのかもな…」

「も、もしかして…通り魔とか…？」
「うそーっ！？あたし怖いの嫌いなのにーっ！」
生徒の不安が急上昇したその時、ホームルームのチャイムが鳴り出す。
「気になるが、今は席に着くぞ。もうすぐ担任も来る」
全員が席に着くと担任の涼音（すずね）先生がやってくる。
黒く長い髪に赤色の眼鏡をかけた美人な教師で、男子生徒には人気も出ている話だとか。
「……」
安里はそんな担任とは新入生から相手をしている。（かと言って安里は涼音先生と付き合っているわけではない）
「皆さんおはようございます。今日皆さんに下校のことについての知らせを持ってきました。夕べに不審者によるひったくり、あるいは暴行が各地で起きたとのことです。そして私達のクラスの中で山下君が不審者と接触してしまいました」
これを聞いた生徒一同はまさかと顔を見合わせる。
「先生！山下は今どこにいるんですか！？」
山下の友人が席から立ち上がる。
「山下君は今、病院にて入院中です。皆さんは下校のでの危険を避けるため、部活の活動を停止することを職員会議で決めました。特

に女子の皆さんはくれぐれも注意が必要です」
「そんな！」
今度は安里が席に立つ。
「俺は４日後に試合があるんです！　練習を放置なんてできるわけがありません！」
「ええ、貴方のことはコーチの尾道先生（コーチの名前）から聞いています。ですけど、その前で負傷を負えば問題に…」
「俺は負けなんて許されない！！　あのジムは俺の親父が残した形見なのに、廃止寸前なんです！協会から3年間チャンピオンでいられるというのなら廃止を中断しても構わないと言われて、今まで守り続けてきたんです！もうすぐで廃止から免れるというのに…そんなことされたら俺のジムが廃止されてしまうじゃないですか！！」
「いい加減にしなさい！！」
涼音先生の怒鳴り声に安里は息を殺した。
「貴方の気持ちはよく分かるけど、これは貴方の為でもあるの…だから…」
「そんな…」
安里は黙り込み、静かに席についた。

（親父のジムが…ウソだろ…？）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

放課後に安里はコーチのもとへと訪れたが、やはり練習はできないとの結果になっていた。
もはや安里に絶望（ゴール）が見えているのがオチであるのだ。

「なぁ、安里」

校門を出て帰ろうとしていた安里の後ろに、先ほどの友人と男子２人、女子２人が話しかけてきた。

「山下を見舞いに付き合ってくれないか？　お前だったら断るたろうとは分かってるけど、お前に言いたくて…」
「…根拠は？」

安里は友人に言うと、涼音先生が現れる。

「安里君が、山下君がいないって時から真剣な顔になってたって立花君（友人の名前）が言ってたのよ…」

「…なるほど……いいぜ」

「え…？」

立花は目を疑った。

「見舞いに付き合ってやるんだ。感謝しろよ」

「す…すまねぇ、安里…！」

安里達はすぐに病院へと向かいに出た後、涼音先生は彼らの後ろをついていきながら思った。

（ここ3年間で変ったわね、安里君…）

＝＝

病院に到着し、山下のいる病室へときた安里達。そこでは医師と話し合っている山下の様子があった。

「山下！」

立花は山下に駆け寄る。

「山下！怪我は無いのか！？」

「あ、ああ。打撲だけだったから大怪我にはならなかった…」
どうやら怪我も酷くはない様子だ。
「しかしまさか、お前が不審者に会うとはな…」
「安里…お前…」
立花は意外な人物が来ていることに驚く。
「生徒がみんな心配してたんだ。早く退院しろよ」
笑顔で退院を祈ろうとする安里だが、医師が彼らに申し訳ないと言わんばかりに話が告げられる。
「申し訳ないことだけど、彼はまだ退院ができないんだ」
「え？怪我はほとんどないのでは…？」
「ええ。彼は打撲だけで済んだというのは本当だけど、精神がとても酷くて…」
「それ、どういうことなんですか！？」
「それが…　！」
医師が何か気づいたその時、安里もその方向に向いてあることに気付いた。
その眼先にあるのは山下。

彼が何故か震えているのだ。

「俺…こんなこと、都市伝説くらいしか知らないんだけど…見たんだ…」

「俺の……俺の目の前に…！」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

『お前…いま俺を笑ったな…？』

『笑ったな……！』

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「バ……バッタの化け物が俺に襲ってきたんだよ……っ！！」

（つづく）

第3話「闇の世界の魔手」

「バッタの化け物…か…」

立花はひどい恐怖心が原因の為、退院に時間がかかると診断されていた。

病院の外へと出た一同の内に安里はそう考え込んでいる。

「立花君、早く退院できたらいいね…」

「けど可愛そうでしかたないよ、ウチ等の生徒が襲われたんだよ？」

「だよなぁ…」

そう話し合いながら門前までくると、涼音先生が生徒達に振り返った。

「みんな、帰りは私が貴方達の家へ送ります。1人ずつ家へ回るので面倒になるけど、危険を避けるためにお願いね」

この様子なら…と、安里はしょうがない顔でいながら賛同する。

そもそも帰りは1人で帰るのが多いので、こういった機会は全くない。安里は黙りながらも先生達のあとをついて行こうとしたその時だ、

「…？」

安里は門を出た時、誰かに見られているのを気づいて振り返る。しかしそこにいる形や影がどこにも見当たらない。

まるでそこには誰もいないかのようだ…。

「安里君、早くしなさい！」

涼音先生に呼ばれる安里はすぐに向かって行く…と同時、病院の出入り口が開いては男性が現れた。

黒くボロボロな服装、まるで不良のような恰好だ。そして男性の見つめる先には、走り去っていく安里の姿が見えていた。

（…あいつ、俺と同じ闇をもってやがる…）

男性は病院から出て、安里達の向かう先へと歩きだした。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

生徒達は無事に送り迎えができ、残っているのは安里と涼音先生の２人だけ。

既に日も暮れて夜になっていた。

「……」

安里は今でも黙っている。練習が少なくなり、どう試合に迎えれば…。
そう考えていた時に涼音先生が話しかけてきた。
「安里君、少しだけ私の話を聞いてくれる？」
「？　何ですか？」
珍しく話しかけてきた彼女に安里は思考を回復させた。
「今日、貴方の家で泊めてくれないかしら。こういうのでなんだけど…」
「はぁ？何で先生を…」
「それは…安里君がボクシングをしている姿を見てみたいのよ。どんな練習してるかを…ね？」
「断る、練習の邪魔だ。俺があのジムを守らなきゃ住める場所がなくなるからな」
安里は拒否をする。が…
「…安里君、確かにあなたの家がなくなったら可哀そうだと私は思う。けど、今安里君がしているのは…」
「うるせぇっ！！」
安里は怒鳴り出す。
「俺はもっと強くならなきゃならねぇ…絶対にだ！！」
安里は涼音先生を放置し、駆け足でその場から立ち去った。
「…安里君…」

涼音先生は夜の中に消える安里を見届けるしかないのかと、その場で立ち尽くしていた。

初めて会った時には、今よりもひどい性格だった。

けど私は諦めたりせず、安里君に見せてあげたかった。

そしてようやく落ち着いたのが、３年生になった時…。

けど直ったわけじゃない、まだ安里君に残された心を磨いてあげないと…。

涼音先生は安里を追いかけに歩き出したその時だった。

「ねぇ貴方、望みってあるかしら？」

「えっ…！？」

涼音先生の後ろに、蝙蝠の翼を生やした女の子が現れるのであった。

＝＝

自宅のボクシングジムに帰宅していた安里は動きやすい黒の服装とズボンに着替え、早速練習を始めていた。
バシンッ！バシンッ！とサンドバックに念入れられた拳を打ち込んでいく。

（もっとだ！もっと強く！ここであきらめたら俺のプライドが許されない…！！）

このジムを、絶対に守る…！！

全力で打ち続ける安里だが、出入り口の戸が開いては誰かが入ってきた。

涼音先生である。

「何だ！！勝手に俺の家に入らないでくれよ！！」

安里は練習を止めて先生に近づく。が…

「…と…」
「あ？」

涼音先生が小さな声で何かを言った。

「先生、何を…　！？」

安里は突如呼吸ができなくなる。

涼音先生がいきなり、安里にキスをしてきたのだ。

（せ、先生…！？）

予想もしないことに安里の力が抜けてしまい、２人は床に倒れ込ん

でしまう。
ようやく唇が離れて安里は息を吸いもどした。
「ハァ…ハァ…先生、何を…？」
「今は涼音って呼んで…」
涼音先生は紫の瞳をした目で安里をじっと見つめている。それは安里が知る先生とは少しだけ違うような雰囲気をしている。
「練習も大事だけど、息抜きも必要よ。だから今夜だけでも、ね…？」
そう言って涼音先生がまた安里とキスをする。
ほろ酔う香りが口に広がり、頭がボーっとなりそうだ。
（何だろう…だんだん、体のいうことが聞かなくなってくるような……）
（あと少しね、あと少しでこの男が私のモノに…）
私の下僕になってくれるわ…。
涼音先生の顔が怪しく見えたのはほんの一瞬だった。安里はだんだ

ん意識が遠のきそうになりかける…と思っていたその時だ。

「待ちなさいっ！！」

恋愛たる雰囲気の中に新手の声がジム内に入ってきた。
涼音先生がキスを止めて入り口に振り向くと、そこには魔術師のような緑と黒の服装をした女の子がいるのである。

「また若い人の生気を吸い取って…それに、関係のない女性に憑依して…どこまでやるつもりなの、ナディア！？」
「…あーあ、見つかっちゃったら仕方ないわよね…。でも手遅れよデネブ、この男の生気はみんな貰うんだから」

涼音先生が立ち上がると思いきや、体から砂が飛び出てまた倒れる。
すると先生の場に先程出会ったばかりの女の子が砂から現れるのだ。

（な、なんだ！？先生の体から誰か出てきた…！？）

安里は何が起きているのか分からなかった。
デネブという女の子は手にしている大型リボルバーを構え、ナディアという女の子は手に炎を生み出す。

「最初に言うわ！　私には碧子（みどりこ）って名前があるのよ！」
「そんなこと、私には関係ないけど…ハッ！！」
ナディアは炎を投げつけ、碧子はリボルバーを放って炎と相殺する。
「面で勝負よ！」
「上等よ、すぐに倒してあげるわ」
碧子とナディアはジムの外へと出ていき、この場の被害は少ない状況で終わりを告げるが、安里の気力はボロボロで立ち上がれることなく視界が暗くなりだす。
変な夢でも見てるのなら、起きた方がいい…。そう思いながら夢の外に戻ろうと、安里は眠りにつくのであった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝

面に出た2人はジムから離れ、人気のない通路へと移動した後に戦闘を再開する。
「デネブ、そもそも貴方は私と比べても力の差があるのは分かって

っいて？今の貴方には魔力なんてものすらないというのに…」
「そんなのやってみなきゃ分からないわ！」
リボルバーをナディアに向け、銃口に光が貯められる。
「でぇぇいっ！！」
引き金を引いて放たれた弾丸は光り輝く鳥となってナディアへ飛んでいく…のはずが、弾丸はナディアの前でバラバラに解体されてしまい、Ｖの字の軌道でナディアを通過するのであった。
「人の顔すら忘れるなんて、昔の貴方と変わってないわね」
弾が分散して外れてしまった直後、ナディアの背後からまた別の女の子が現れた。
蜘蛛のマークが書かれた茶色いシャツ、赤のスカートに黒のニーズソックスで短い茶髪に丸い眼鏡をかけており、ナディアの右横に立つ。
「ティオナ・ルレイユ…！」
「フフッ。お久しぶりね、デネブ。何度も言うことだけど、私の姉さんの邪魔をしないでほしいわ」
ティオナは右手の鋭利な爪を前へ突き出す。すると爪先から糸が飛び出し、碧子の両手、両足を一瞬でからめ捕った。
「きゃあっ！？」
裏返りそうな声を上げてリボルバーを落としてしまう。

「分かってるでしょ？私の糸にはもう一つ仕掛けがあるのよ…」
「！！　体が…熱い…」
碧子は急に酔いに陥ってしまい、息が荒くなってしまう。
「大したことないわね…。私は男のところに戻るからあとはお願いね」
「ええ。どうせならもっと派手に…」
ティオナは空いている左手の爪先から糸を出し、今度は碧子の胸を囲んで強く締め付けた。
「い…嫌ぁ…やめ…てぇ…」
半泣きになる碧子だが、糸に捕えられている間は動くことができない。
酷いと思わんばかりな雰囲気に紛れ、周囲から黒い気がティオナに集まり始めた。
「随分集まるわね。やっぱり男の人は女に弱いのかしら？それとも…アレだから？」
と、ティオナは碧子を拘束していた糸を切って解放させたと同時に右手を構えながら碧子に近づく。
よくよく見ると爪先に緑の液体が流れ出ており、その一滴がアスファルトにたれた瞬間にジュウッと溶けだした。
この爪には糸を出すだけでなく猛毒までもあるようで、あんなのが体に刺されば死ぬに違いない。
「どっちにしても死んでもらうわよ？何も力の無いようじゃ、こう

なることを貴方の体に…」
「ひっ…！？」
猛毒の爪を上げ、そのまま碧子へと振り下ろす。
（もう、ダメ…）
襲い来る爪に碧子は目を瞑った次の瞬間、真横から何かがティオナの爪に体当たりかせ仕掛けられて直撃する。あまりの痛さにバックステップ距離をあけ、左手でぶつけられた右手を抑えながらその正体を見た。
「何？何なのあれは…」
向かおうとしていたナディアも立ち去る前に気づいてティオナの目先を見つめ、碧子は襲ってこないことにゆっくりと目を開ける。そして彼女達のようにその先を見つめた。
「…バッタ？」
その正体とはバッタだった。ただし、何やらメカっぽい形をしたバッタであると同時にチカチカと赤いランプを点滅させながらどこかへと跳ねながら鉄柱へ移動していくと、その陰に男性が背もたれをしていた。
バッタは男性の手元までジャンプをするとそれを男性がキャッチし、鉄柱から離れて3人の元に立った。
「今、俺を笑った奴は誰だ？」
「な、何よ貴方…」

ナディアは後ろに一歩下がり、ティオナは爪を構えて威嚇をする。
「…なるほど、俺を笑ったのはそこの2人か…。いいよなぁお前等は、どうせ俺なんて…」
男性は何処からか銀色のベルトを取り出して腰につけ、バックルの上にあるスイッチを押すとバックルが展開する。
そのままバッタを横からスライドするようにガシャッとセットした。
「変身」
≪ＨＥＮＳＨＩＮ≫
バッタから音声が鳴り、体が緑の装甲に覆われる。
やがて装甲が体中を全て覆い、緑色のバッタの姿をした戦士へと変わったのであった。
≪ＣＨＡＮＧＥ　ＫＩＣＫ－ＨＯＰＰＥＲ≫
変身完了とされる音声がなり、戦士は深いため息をつきながら顔を上げる。
「…貴方、何者？」
ナディアも応戦にと炎を生みながら質問した。
「…キックホッパー。地獄から来た男だ」

（つづく）

第４話「接触」

「くそっ…このまま終わるわけには…！！」

安里は今、絶望している。
闇の中を照らすリングに、彼は血と汗が塗られた顔で弱まっていた。
相手は今回の試合相手となる韓国人の選手。強豪相手に、安里の不敗神話が今、音を立てて崩れようとしている。

（ダメだ！勝たなきゃダメだ！俺は…）
「勝たなきゃダメなんだぁぁぁ！！」

安里は飛び掛かる獅子のごとくに相手へ飛びつき、右拳を構えながら相手の顔面へ突き出す。
相手も右拳でクロスカウンターとなり、互いの拳が相手へ当たる…かと思われたのだが、安里の右拳は外れ、相手の拳は安里の右頬を直撃し、そのまま床へ叩き落とされてしまうのであった。

「１！２！３！４…」

レフリーがカウントを始める。
これで諦めるわけにはいかない安里はすぐに起き上がろうとしたその直後、体に重圧が襲い掛かり、体が思うように動かなくなってしまう。
無理矢理動かそうとしても体はピクリとも動かない。と、その時、

「９！１０！」

レフリーがテンカウントを終え、試合が終了。

安里の不敗神話が打ち砕かれてしまった…。

「――――っ！？」

ハッと気づいたとき、彼はリングの上ではなくベッドの上で眠っていた。
どうやらさっきのは夢だったようであるが、あれがもし本当だったら今頃どうなってただろうか…と思っているのも束の間だった。

「安里君、起きたのね」

部屋から誰か声がしたかと思うと、涼音先生が入ってきた。服装を整えており、すぐに学校へ向かうようである。

「せ、先生…？」
「急にごめんね。ご飯を作っておいたから食べて、元気で学校に登校してきてね」

そう言い残して先生は部屋から出ていき、安里は体を起こしてリビングへ来てみると食卓にはご飯とみそ汁、メインとなる生姜焼きが置かれていた。
椅子に座り、生姜焼きをいただいてみる安里に力が与えられるかのような味がしみ込んでくる。彼への愛情かどうかは知らないが美味しいと、やけ食いをしながら完食。安里は制服に着替え、カバンを背負いながら学校へと向かった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

安里のいる教室へやってきた時、彼のの目には何か賑やかな雰囲気

が見えていた。
何かを話しあっているようだがそのことを気にしない彼は自分の席に座ってカバンから教科書を取り出していると、他の生徒が安里へ話しかけてきた。

「おい安里知ってるか？今日は転校生が来るんだってよ」
「は？転校生？」

その言葉に安里は意外な顔で生徒に向ける。
さっきの会話がそうだとすれば納得できると思える安里だが、チャイムが鳴ったことに全員が席に座り、涼音先生が入ってきた。

（昨日、先生とやったんだっけ…）

安里は昨日起きたあの事を思い出していた。
それを今と比べればまるで違う。彼女の裏は実はこんな人でしたと思える姿を想像していた彼だが、ハッと我に返り妄想を消し飛ばした。

（おいおい、俺は変態か。なんて俺があんなこと…）
「皆さん、もうお分かりのように今日から新しく私達のクラスに転入生が入られます。仲良くできることを私から思っているので、いっぱい話し合ってください。それじゃあ、入って来てくれるかしら？」

涼音先生が外にいる生徒を入らせるように指示すると女子生徒が入ってきた。
男子生徒は「おおーっ」と見惚れてしまい、女子生徒は「あの子可愛い」「アイドルとかやってそう」な話をし合いながら彼女を見ている。

女の子はメガネをかけて茶髪の丸く可愛い髪と瞳をして大人しそうな性格をした女子だ。

「『藤川（ふじかわ）　恵戸（けいと）』です。まだ友達もできてなくて困っているのですけど、皆さんと仲良くなれることを楽しみにしてます」

「じゃあ藤川さんの席は…安里君の隣でいいかしら？」

（ちょっ！？）

これはお約束という奴だろうか、いきなり転入生が安里の隣に座るという展開が起きた。

「おいおい安里～。まさかこんな美少女を独り占めする気か～？」

「う、うるせぇっ！！俺はそんなの興味ないからなっ！！」

反論する安里だが、恵戸は彼の席にやってくる。

「よろしくね」

彼女はウインクするがそれを無視して窓を眺める。

＝＝＝

ぞれあり、恵戸も校門へ出て帰ろうとしていたその時に左側の方向に振り向いた。
そこには鉄棒につかまって懸垂をしている安里の姿があり、恵戸は彼に近づいてみた。

「58…59…60…」
「安里君！」

恵戸が安里に話しかけてきたことに安里は数えるのをやめ、地面に足を立たせると彼女に返事した。

「何だ？練習の邪魔をしてほしくないんだがな…」
「練習？何の練習なの？」

恵戸は何か興味がある様子だ。

「…俺はボクシング部に入ってるんだ。現役ジュニアチャンピオンで、3日後に防衛戦がある」
「チャンピオン！？へぇ～、そんなことしてたんだ」
「してなかったら俺は自由の身だけどな。俺は今ピンチなんだ」
「ピンチって？」
「俺の実家で、親父の形見のジムが潰れそうになってる。今回の試合に負けたら即廃止だって、協会から言われたんだ…」
「そうなんだ…。今でも緊張してるの？」
「どうかな…ってか、何でそこまでして俺に話しかけてくるんだ？俺は…」

安里はイラ立つ顔になるが黙ったままでいた。

「…ねぇ、貴方のボクシングをしてる姿を少しだけ見てみたいな」

「は？」
「チャンピオンだったら凄いんでしょ？私はスポーツ観戦が好きだから見てみたいの」
（スポーツ観戦…なるほど、俺に興味ある理由ってそれか）
安里は構えをとり、ジャブやストレートと素早いコンビネーションラッシュを彼女に披露してあげた。
「わぁ凄い！動きも早くて強いんだ！」
「……」
安里には何も言うことが無かった。今更女に褒められてもいい事なんて何もない、それは彼が幼いころに親からの教育で学んだ一つの学からだった。
彼は女には触れない。触れるなど拳を持つ男には似合わないと…。
「…そういう人がいてくれるなら、私も安心できるかも…」
「…？」
安里は恵戸に顔を向けた。
「私、絡まれたりしたことがあったから怖くてね、もし貴方みたいな強い人が傍にいてくれたら守ってくれるかもって…なんて思ってもあるわけないわよね…」
苦笑いでいる恵戸を見て、安里はバカバカしく思っていた。
「そういえば、安里君は『してなかったら自由の身だ』って言ってたけどそれってどういう意味なの？」
「意味？そんなのは…お前には関係ないだろ」

「そう？」
「ああ、お前が何度言っても無駄なことだ」
安里は懸垂を再開するのだが恵戸がまだ話しかけてくる。
「あの…せっかくだから、貴方と一緒に帰ってもいいかな…？」
「おいおい、練習中だってのに…チッ、あと４０回したらそうするよ」

そして…

「９９…１００…。よし帰るか。あとはジムでトレーニングか…」
懸垂を終えて帰ることにした安里と恵戸は２人で校門を出る。時間は夕方から日の出が向こう側へ消えていき、日没になろうとしているところだ。
薄暗くなる街に恵戸はだんだんと怖くなってきたのか、安里の右肩にくっつきながら歩く。
「おい、まだ夜じゃないのに怖がってるのか？」
「ごめん…どうしても絡まれることが多かったから…手を繋いでもいい？」
「…好きにしろ」
その言葉に恵戸が安里の右手を握った。
（俺いつからこんなになっちまんだ…本当は俺、彼女が欲しかったのに…）

思い出されるあの過去に遮れ、辛くする安里と恵戸に外灯が照らし始める。
この時間ならいつ不良とかが出てきてもおかしくないのだから気を付けてねばなるまいと思っている安里だが、この時に昨日、立花が言っていたバッタの化け物ということを思い出した。漫画でもあるまいなことだが、本人が見たとなればそれも気になる。しかしそれだけ恐ろしいのなら十分危険性があると考えながら歩いていた時に安里が立ち止った。

「どうしたの？」
「…昨日から俺を見てやがる奴がいると思っていたんだが…俺に何か用なのか？」

安里が後ろに向いてそう言った。
2人の後ろに見えているのは、黒いコートを着たあの男だったのだ。

「！？」

恵戸は安里の背中に隠れる。が…

「お前、今俺のことを笑ったな？」
「…は？」

訳が分からなかった。笑ったってどういうことなのだろうか？それどころか相手は何か怒った様子で近づいてくる。

「恵戸、走るぞ！」

危険を顧みる前に恵戸の手をとりながら逃げ出す安里は、5分くら

い走り続けて公園までやってくる。
もうすでに夜となっており、周りがもう危険にさらされてるかのような雰囲気でいっぱいだ。

「はぁ…何だったんだよあの男は…」
「怖かったけど…ありがとう。安里君が私を守ろうとしてくれて…」
追って来ないかと様子を見ている安里に恵戸が顔を近づけて言う。
「…別に俺は逃げたりはしなかったさ。普通なら追い返すつもりだったんだが・・・あの男は何かが違う」
「違う？どうして？」
「どうもこうも、さっきの言葉をお前も聞いたんだろ？」
「う、うん…」
2人が聞いた言葉をもう一度思い出す。

『お前、今俺のことを笑ったな？』

「なんで俺が笑わなきゃいけないのか、訳が全く分からない。それに、昨日に会ったような覚えも…」
「昨日って？」
「病院でそんな気がしてな。それがそうなのかまでは分からないが…とにかく帰るとしよう。家、遠いのか？」
「ううん、ここからなら近いから1人でも平気」
「分かった。じゃあ俺は帰るぜ」

安里は1人で公園から出ていこうとした。
その時である、

「あ。安里君」
「ん？」

恵戸に呼び止められ、安里は振り返る。

「…安里君って、本当は優しい人なんだね」
「…俺の勝手だ」

安里はそう言い残して公園から立ち去った。
残された恵戸は彼の姿が消えていくまで見ていると、後ろ側にある影からナディアが現れて恵戸…否、彼女のフリをしていたティオナに話しかけた。

「引き寄せるつもりなのに手放すのはどういう理由なの？」
「仕方ないわ、アレがあるもの」

ティオナが指差す先には、茂みの中から2人を見ているバッタのメカがいる。

「…それは厄介ね。潔く立ち去ったほうがいいわ」
「ええ、」

2人はその場から安里とは違う方向へ去っていく。危うく安里は餌食にされるのを免れたこのバッタが幸いにも、今日1日が何事も起きなかったかのようにして終わりを告げるのであった。

3日後。試合前日の自宅にて…

（いよいよ明日、全てが決まる日…）

安里は最後のスパートに賭けながらサンドバックに打ち込んでいた。この日まではトラブルもあったが、あれから調子は良くていけそうだと確信している。
あとは明日、全てを燃やせばよい…。

「よし…これでもういいだろう」

戦いの準備は整った。試合開始は早朝に行われるので、明日に備えて安里は早めに寝ることにする。
けど寝ようとすればこれが何か最期を思ってしまうこともあるかもしれない…。

「…って、なにマイナス思考を考えるんだよ。俺は今までやってきたことを引き出すだけでいい。それに…」

安里は3日前に彼女（ティオナ）から言われた言葉をもう一度思い出す。

「あの時、少しだけ嬉しく思ってたさ…」
いつもは見せてはくれなかった彼の顔には笑顔が表れていた。
「…さて、もう寝よう。明日は必ず…必ず勝つ…！」
安里はベッドの上で横になり、輝く月に照らされながら眠りにつくのであった。
果たして彼の成果が出るのか…それともどうなのか…
全ては今、未来にしか分からないことである。

＝＝＝

の姿をした化け物が現れたのだ。
しかもその亀はフィルムの不具合みたいに胴体までが地面に埋まり、足が頭の上にあるような形でいる。

「な…っ！？」

生徒は後ろに下がろうとしたその時、亀の化け物が生徒へ語り継がれる。

「お前の望みを言え…」
「の…望み…？」
「そうだ。お前の望むことをどんな事でも叶えてやる。但し、代償はいただくがな…」

亀の化け物は自信があるかのようにして生徒に言うが、逆に生徒は怪しく思っていた。

「そんな話のるか！大体代償って、命と引き換えじゃねぇかよ！」
「安心しろ、誰もお前の命と引き換えとは言っていない。寧ろそのことは我々には古い話だ」
「え？…本当なのか？」
「本当だ。命は奪わずにお前の望みを叶えよう。さぁ言え、お前の望みは何だ…？」

この言葉に生徒の危機感は消え、この時を待っていたかのような欲望が解放される。
ニヤついた顔をしながら、生徒は亀の化け物に言う。

「いいぜ、言ってやるよ。俺は恨んでいる奴がいる。明日ソイツの試合があるんだがそこでだ、ソイツを復讐してくれよ。手段は何で

もいいからさ」
「…いいだろう。その恨んでいる奴の名は…？」
「二神安里って奴だ。おもいっきりやってくれりゃ十分だ」
「…お前のその望み、確かに聞いたぞ…！」

すると亀の化け物が地面へと消え去り、生徒の顔は前回まで上げられた欲望の笑顔へとなっていた。

「見ていろよ安里…お前の人生もこれまでだ！！アーハッハッハッハッハッハッハッ！！！！」

真夜中に聞こえる悪魔の高笑い。
それは明日、安里の最大の運命のなるのは彼以外にまだ誰も知ることではない…。

（つづく）

第5話「試合開始」

翌日。午前5時、日本武道館にて、

「全国のボクシングファンの皆様おはようございます。本日はジュニアリーグチャンピオン、二神安里選手と韓国代表、リ・オンド選手とのタイトルマッチがこの日本武道館にて開催されることとなっております。まだ日の出が手でいない時刻とはいえ、大勢の来客が入り口前で待機されております」

試合当日を迎えたこの日、会場となる日本武道館にはテレビ局からの中継が流れていた。ジュニアリーグチャンピオンである彼を見てくれているファンからはジム解体を反発したりする者もいてはおり、まれに協会へ押しかけたという珍事件があったことも安里は覚えている。

とそこへ、入り口の通路からバスが現れたと同時に人々の熱狂に包まれながらテレビ局が動きだす。停車したバスから扉が開き、尾道監督やサポーターの部員、そして安里が出てきた。

「たった今、二神選手がバスから出てきました！今回の相手が相当手強いことなのか、いつもより集中しております！」

安里は真剣な目つきをしながら玄関を入っていく。

移動中でいたグループは監督の合図にて円になり、監督からの話が始まる。

「俺達はここまでしか通れない。あとは安里、この試合でできることを全てやり遂げろ。これが俺の最後の助言だ」

「安里、絶対にやれよ！」

「俺達も全力で応援してやるからさ」

部員は期待を安里に与えていくが、その内の一人は冷たい顔をしながら安里を見ていた。
それもそのはず、その部員は化け物と契約したあの生徒なのだからだ。

「さぁ、俺達も移動するとしよう」
「はい！」

監督に続いて部員達は安里から離れて行く。
そして男も安里の横を通りながら去ろうと真横に来た瞬間、安里の耳元へ声を出した。

「…せいぜい死ぬなよ？」
「！」

今の言葉に安里が男に振り向く。

「おい、三田（みた）！」

安里は男の名前を言った。
何だと返事はせず、そのまま部員の去った方向へと歩いていく三田にイラだってしまう。

（なんだよあいつ…ん？）

安里は三田が歩いた箇所を見てみると、なんとそこに砂がこぼれていたのである。
別に三田の靴が汚れているわけではないのに何故落ちているのか…と考えていた安里だが、そこにテレビ局の者達がマイクやカメラを手に押しかけてくるのであった。

「二神選手！今回の試合に自信はあるでしょうか！？」
「相手は韓国代表ですが意気込みは！？」
「えっ…えっと…すみません、ノーコメントで」

安里は何とか切り抜けようと手で顔を隠すようにしてカメラから避けて逃げ出そうとしたその時、目の前にいた中年代の男性陣により安里の足が止まった。
この男達はボクシング協会の者であるのだ。

「やぁ安里君、ついにこの時が来たようだね。君の人生がどうなるかは今回の試合で決まる。分かっているようだがせいぜい頑張りたまえ、以上だ」

その内の会長である男はそう言いつけてテレビ局の元でインタビューを受けることになる。この隙にと安里は奥の控室へ向かい、その場へ来た安里はため息をついた。
練習をしてきたとは言え、今思えばそんな練習していない気だ。

そう、４日前、３日前のあの日のことのように…

安里はドアの取っ手を握りながら開けたその時、

「バァッ！」

「うわっ！？」

ドアの奥から声がした驚く安里。するとそこには…

「…恵戸！？」

ティオナだった。テヘヘと笑顔で出てくる。

「驚かしちゃってごめんね、安里君の緊張を解すのに役立てれるかなって思ったからしてみたんだけど…悪かった？」

ティオナは両手を合わせながら安里の返事を聞こうとしており、安里はそれに答えた。

「…いや、気にはしてない」

「え？」

「少し考えていたんだけど何とか収まったよ。いつもこんな感じで試合をしてるから悩んでたんだけど、ちょうど良かったよ。ありがとう」

安里はティオナに礼を言いながら室内に入ろうとしたその時、

ギュッ

「！！」

安里は立ち止まった。
ティオナが安里の背中に抱き付いているからである。

「…嘘ついてるでしょ？本当はまだ悩んでるって顔に書いてあるもん…」
「…前に変な出来事かあったんだ。信じていいのか分からないくらいのな…」

抵抗などしなかった安里はティオナに振り向き、練習中に起きていた奇怪な事を全て話した。
始めは信じられない様子だった彼女もリアルな感覚によって信じれる意志が膨れていき、話し終えた時には安里の辛い気持ちがとてもよく理解している。

「そんなことがあったんだ…。けど、涼音先生の体から出て来た女の子って何か気になるわね」
「俺は信じない方だけどな…」
「確かに宇宙人が目の前に現れたりとかしたら信じないもんね。けど、最近からこんな話があるよ？何でも願い事を叶えてくれる怪物がいるって話、」
「願い事を叶える怪物？」
「うん。その怪物に願い事を言うと、どんなものも1つだけ叶えさせてくれるんだって。私もできたら願い事を言いたんだけど、なかなか姿を見ることができないって話だよ」

ティオナが言うことには何か興味がわきそうな話だ。だが安里は、
「俺はどの道、プライドがある。正直願いなんていらない」

断固否定だった。

「ええ～っ。もったいないと思うんだけど…」

「悪いがそれくらいにしてくれ。論点からズレていたが、俺は今日勝たなきゃヤバいんだ」

「あ、そっか…。ジムが廃止されるんだよね…」

「絶対に勝つ…。勝って、協会の奴らを黙らせなきゃいけない。もう時間もないし、ここからは俺1人にさせてくれ」

「う、うん…。あ！安里君…」

ティオナは控え室から去ろうとしたが振り返り、安里の元へまた戻ってきた。

「ん？まだ何か……」

その直後に安里の言葉が途切れる。

ティオナにキスされているからだ。

「…これ、私の気持ちだから頑張って…」

「…確かに受け取った…」

安里は彼女から背を向け、奥にある椅子に座りながら思考を始めた。ティオナはそんな彼を見守りながら控え室を去り、玄関を出て裏側の通路まで来たところには姉のナディアが待っていた。

「彼を連れてくるつもりじゃないのかしら？」
「残念だけど、今回は無理みたいよ。イマジンの契約者と絡んでいるのだから」
「契約者？…ああ、この男ね」

ナディアが今持っている一冊の本に掲載されているページをティオナに見せると、昨日にトータスイマジンと契約をした三田の顔写真と、その望みの内容が刻まれている。

「確かに私達が動かせば、時の運行が変わるわね。残念だけど今はお預けとなる代わり、あとからでいいんじゃないの？」
「どうかしら、私はそれに嫌な予感を感じるのよ。あの人は強い憎悪も感じている。そうだとすれば、あの人は手に入れてしまうかもしれないのよ…」
「…ゼロノスかしら？」
「きっとデネブと契約してしまうわ。その前に止めなきゃ…嫌な予感が起きるその前に…」

＝＝＝

思考から１０分後、係員が控え室に現れて安里が椅子から立ち上がり、その後をついて行った。
いよいよ始まろうとしているこの勝負に安里の拳が強く、血が出るくらいな力で握られる。
待機場所では今着ているジャージが脱がれ、白のトランクスを身にしていたその時、合図が来た。

「さぁ、お待たせしました！本日、リ・オンド選手の相手となる若き無敗戦士、二神安里選手の入場です！！」

司会の紹介により安里がスポットライトに照らされながら入場。同時に歓声が上がり出ており、垂れ幕などの様子があちこちに見えている。
安里がリングに入ると、相手の選手が自分側のコーナーでガシャンガシャンと打ち込んでいる様子があった。その威力からしては相当な者…外国の力というのはこれほどなのだろうとは思うが、安里はこれよりデカい相手もいることだろうと汗を垂らしながらで肩を回す。

「よし…やるか」

安里は褌を締め直すように気を引き締め、相手と互いに向き合いながらグローブを合わせ持つ。

「ＢＯＸ（はじめ）ッ！！」

そしてゴングが鳴った。試合開始である。

「さぁ始まりました。ジュニアタイトルマッチ、二神選手対リ・オンド選手。実況は私、川西（かわにし）と解説の清隆（きよたか）がお送りいたします。さて本日の挑戦者となるリ・オンド選手ですが清隆さん、この選手の特徴というのは？」

「すばり、体の細さと柔軟性ですね。二神選手はスピード重視の選手ですけど、体をバネにしたような柔軟さでリズム良く避けながらカウンターを狙うタイプなんでしょう。一旦縮んだ瞬間を狙えばそれほどの威力が引き出せるということですね」

「なるほど…と、話しているうちに二神選手が動きました！右左とフックの応酬を仕掛けています！」

安里は前進してフックを仕掛けるが、相手は大振りで来ている攻撃を避けていく。

更に一撃を下に伏せながら避けた瞬間、相手のすきを作ってしまった安里は素早く防御態勢をとった。

バシィッ！！

（くっ…！？）

なんとも強い威力に防御がすぐ崩されてしまい、反撃を許してしまう。相手のジャブを2発受け、右フックを食らってしまう。

「おっと、二神選手！この攻撃はそれほどキツいものだったのか、無防備なままで喰らっています！」

「うーん…二神選手の力みが少し強かったのか、相手の思惑通りな動きになってしまったようですね。これまでの試合とで比べるとこれはマイナスな事でしょう」

「チィッ…！！」

安里は今まで受けた分をお返しにとジャブで狙うが、これも外れて攻撃をまたもや受けてしまう。

「グッ…もう一回…！！！」

右ストレートもやるが外れて攻撃を受けていく。
その瞬間から相手のラッシュが始まった。さらに追い撃ちにと、安里がコーナーにつかまってしまう。

「アーっと！どうしたのでしょう！二神選手がなんとコーナーに引いてしまう事態が起きてしまいました！これは今までもないプレッシャーなのでしょうか！？」

逃げ場なく、ガードしている腕が砕かれるようにしていたんでいき、安里は怒り狂いとのことで視界が消えそうになっていた。
あの時のこともごちゃまぜとなり、頃の中で彼は叫ぶ。

（うるせぇ…うるせぇうるせぇ…うるせぇっ！！！）

その時、安里の腕の痛みと周りの音が消えてしまった。
何が起きたのかと思えば、何故か知らない空間の中にいる。
そして目の前には…

「！？　何だよお前…」

目の前に見えているのは、緑色のバッタをした人間…らしい人物。
否、前に見た覚えがある人物だった。

「お前…誰なんだ…！！」

安里はその人物に言う。

「俺は…闇の住民だ」
「闇の住人…？」

人物は男らしいが、闇の住人との言葉に疑問を抱いた。

「俺は以前は表で生きていたごく普通の人間だ。だが俺は捨てられてしまい、こうして闇の中をさ迷い続けてきた。相棒も同じように して闇の中で生きていた時、俺は相棒と共に闇の中を光を探す旅をしていた。だが相棒は…旅の途中で死んだ。俺は悲しんださ、相棒がなくなるなんて…だがその時に相棒は言ってくれた。『弟がいなくても、他の奴らと話せることができるじゃないか』って…。俺は弟が残してくれた言葉を信じ、孤高な住民といろいろと話し合ってきた。そしてある日、俺はとんでもない出会いをした。それがお前だ」
「お、俺だって…！？どういう意味で…！！」
「お前はあの時、相棒と同じ顔と闇を持っていたからだ。お前のその気もち、俺にもよく分かる。上から踏まれるような愚痴に笑われ…いいよなぁ、面の奴らは好き勝手言えて…」

男はため息をつきながらさらに言う。

「お前、名前は何て言う？」
「名前…？」
「それくらいあるだろ？名前は…？」
男が気に食わなかった安里だが、素直にして自分の名前を言った。
「…二神安里…」
「安里…いい名だ。俺は美方（みかた）アズ。またの名で仮面ライダーキックホッパー…ところでだが安里、」
男、アズは安里に2度目の質問をした。

「お前、俺の弟にならないか？」
「え…？」
安里はまさかと目を疑う。
「俺と一緒に光を見つけよう。もう一度俺は人生をやり直したい気持ちでいる。俺は相棒と、もう一度あの生活を…」
「…そんなに大切な奴なのか？」
アズの話を揺さぶるようにして安里が逆に質問した。
「ああ。最後まで俺の後をついて来てくれた相棒だからな…」
「じゃあ…俺は…」

ガシッ

「…！？」

次の瞬間、周りの声が消え、1人の声が出てきた。

相手からすればそれは恐ろしい。

黒いバッタの姿をした人物に身を包ませた、二神安里の声が…

「汚してやる…太陽だなんてっ！！！！！」

（つづく）

第6話「契約」

「おいおい、この状況はマズいんじゃねぇのか！？」
「安里ーっ！コーナーから離れるんだーっ！」

セコンド側で見ていた部員が声を上げ、観客側で見ていた女子生徒達は不安になりながら話し合いだす。

「安里君がこんなにまで痛めつけられちゃうなんて…」
「きっと大丈夫よ！あー君（安里のあだ名）は絶対勝つって！」
「頑張れ安里ーっ！」

中には信じてくれている生徒のおかげで不安が消え、最後まで応援する努力が与えられる。
だが次の瞬間に起きたのは、反撃よりも衝撃な恐怖だった。

バシィッ！！

リング内に安里の右ストレートが相手へヒット。しかしそんな安里を見た者は皆、空いた口が塞がらずな静かさへと化してしまうのであった。

「汚してやる…太陽なんてっ！！！！！」

安里が言葉にしたのは、キレた彼ではなく、殺意を込めた強い憎しみの言葉だった。
その直後に安里が相手選手へ飛び掛かってラッシュを始める。

「な、何ということでしょう！！追い詰められていた安里選手がまさかの激怒で反撃に出たのですが、これは本当に安里選手なのか！？もはや目の前の標的をただ倒すために動く獣のように暴れています！！」

実況も安里の脅威な姿を見て驚愕しており、部員はお互いの顔を見合わせながら安里を疑った。

「おい、あれって安里なのか！？」
「いくらなんでも、普通あんなにボコるかぁ！？」
「正直俺が相手なら気絶どころじゃすまねぇぞ！？」

ザワザワと来る不安と殺気。それを発する原因である安里はひたすらに殴り、殴り、殴っては距離をあけて殴りにかかる。

「うおぁっ！！！」

相手選手を床へ叩き落とすように顔面にグローブを当ると同時に、相手選手は押しつぶされるような強い一撃を受けて床へ顔面を強打した。
息を上げる安里だが、まだまだこんなものじゃないと相手を掴んで再び殴ろうとしたが、レフリーは安里を取り押さえて相手選手から離れろと指導を受ける。
しかし…

「どけぇっ！！」

安里はなんとレフリーを突き飛ばしてしまったのである。

これを見た観客は完全に凍りつくようにして驚き、安里はもう一度相手を掴んで殴りつけるのであった。

「君、やめんか！！減点だぞ！！」

「うるせぇっ！！！お前等なんか、お前等なんかがいるから俺達は地獄で生きなきゃいけねぇんだ！！！クソゴミ共っ！！！あかんたれっ！！！面なんかで遊んでんじゃねぇっ！！！！！」

頭部から血を流している相手選手をまた掴み、今度は腹へ叩いては叫び、叫んでは叩いてと暴れ続ける安里。

すると監督がリングに上がり、レフリーと2人掛かりで安里を床へ突かせながら動きを止めてしまい、監督は安里へ怒鳴り出る。

「いい加減にせんか安里！！！お前がしているのは殺害だぞ！！！」

「うるせぇっ！！！うるせぇうるせぇうるせぇっ！！！！」

怒りのたけをぶつけまくる安里だが、次の瞬間に天井から何か変な音が出る。

ベキッと何かが折れた音…すると上からライトが相手選手へ落下していく様子を目の当たりにし、安里は取り押さえている体を弾き返すようにして振りほどきながら向かい、そのまま突っ込むスピードを生かして相手選手を掴んで落下場所から放り投げる。

そして…

ガシャァァァ――――――――ン！！！！！

「キャアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！」
女子生徒達は悲鳴を上げてしまった。
安里は落下してきたライトに潰されてしまったのである。
「安里っ！！！」
部員達はリングを上がって彼の元へと来る。
「おい安里、嘘だろ！？」
「誰か救急車！！早く救急車を！！」
急に騒ぎ始めた観客に紛れ、実況も黙る様子はなかった。
「な、なんと！！天井から落下してきたライトに安里選手が潰されてしまいました！！相当の重傷ですが意識はあるのでしょうか！？」
直後に治療班が駆け付け、安里の安否を確認しながらライトをどかしてすぐに止血しながら担架へ体を運ばせると、急ぎ足で会場から場を去っていった。
それでも収まることのないこの会場の中では、1人だけ冷静にかつ、計画通りだと笑う男がそこにいるのであった。
（残念だったな安里。これでお前も終わりだ）
三田である。
イマジンと契約した三田は人ごみの中へと消え、彼は会場の外へ一目散に出て行った。
するとそこには、昨日契約していたトータスイマジンが迎えてくれ

たようにして立っている。

「お前の望みどおりにやってあげたぞ…」

「上出来だ。これで俺はトップにお乗りでたってわけだしな…」

「…では、契約完了だ」

次の瞬間に三田は「は？」と目を丸くしながらトータスイマジンを見る。

「え？ちょっと待て！！契約ってどういう意味だよ！？」

「お前の望みを聞く前に言っただろう。代償をいただくと…」

「命じゃないんだろ！？だったら契約って…」

「我々が引換とするのは命ではなく…”時間”だ。お前の過去を引換とする…たとえお前が過去で死に、現在で消えて無くなろうともだ…」

「う…うわあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！？？」

三田は感じた。殺されてしまうと感じた。

そして彼は会場へ逃げ込んだ。仲間の元へと無我夢中で走り、後ろから来る魔手を振り向かずに走り、部員の所まで戻ってくる。

「た、助けてくれ！！死にたくないんだ！！」

「三田ぁ！？どうしたんだよ急に！」

慌てて三田に話しかけた直後、観客が一斉に悲鳴を上げて離れ始めた。

トータスイマジンが会場に入ってきたのである。

「か…亀！？」

「ってか、こっちに来てるし！？」

トータスイマジンはお構いなく三田へ近づいてくる。

「や、やめろ！！来るなぁっ！！！！！」

その時だった。トータスイマジンの横からキックホッパーが現れ、トータスイマジンを蹴飛ばす。

「お前…今俺を笑ったな？」

「何だ、貴様…！」

対抗するトータスイマジンだが、変身者であるアズは回し蹴りで返り討ちにし、ホッパーゼクターの脚部分を右へ操作する。

「ライダージャンプ…」

≪ＲＩＤＥＲ　ＪＵＭＰ≫

アンカージャッキーが供えられた左足にエネルギーがチャージされ、アズは４メートルも行くハイジャンプで飛びあがり、素早くゼクターを操作した。

「ライダーキック…！」

≪ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ≫

左足にタキオン粒子が流れ、トータスイマジンへ急降下していくア

ズに対してトータスイマジンは甲羅にこもってガードしようとしたが、直撃した瞬間に強い反動で3メートル程吹っ飛ばされてしまう。それ以外にダメージは軽減しており、健在なトータスイマジンは、三田の元へ飛び掛かると同時に彼の体が真っ二つに裂け、その中にある空間へ入り込んで行った。
トータスイマジンが入り込んだ後に体が戻り、三田は一気に来た脱力で気絶してしまう。

「おい、三田！！大丈夫かよ、三田！！」
「何がどうなってんだよ！？」

部員はだんだんと恐ろしくなり、今すぐ逃げ出したい気持ちへと高ぶったその時だった。

「すみません！その場を通してください！」

この状況の中で藍色の髪色をした青年と、白髪に黒い猫のような帽子を被る少女が現れる。

「な、なんだよお前…？」

部員達はそんな2人を見て伺う。特に少女には何か違和感があるからだ。

「別に僕達は怪しいものじゃないよ。それよりカナエちゃん、契約者はこの人（三田）だよね？」
「うん、この人で間違いないよ」

青年は三田の近くまで来ると何かのチケットを取り出した。
そのチケットは古いように見えて、何故か骸骨のマークをしたいか

にも不気味なチケットだが、それを三田の額に翳した瞬間に数字が焙り出される。

「２００３年、７月２１日…」

青年はその数字を見てすぐ少女の顔に振り向いて頷くと、再び三田の体が裂けてく右岸が現れ、トータスイマジンと同じようにその中へ入り込んで行き、また閉じて元に戻るのであった。
あとに残されたのは、三田の体からこぼれる砂や、観客のざわめき、そして…

この試合の痛い思いがその会場で残されているのであった。

「…ハッ、俺も潮時か…」

アズも要は無いだろうと、人蹴りで客席へと飛び越えて離脱した。

＝＝＝

声が聞こえた。部員達の声である。それに涼音先生も来てくれている。
周りを見た時には、ここは病院だとの把握が数秒後に浮かび出た。
「お前等……―っ！！？？」
安里が起き上がろうとしたその時、左腕から激痛が走った。
「安里君、残念だけど今は絶対安静と医師から告げられてるの。そのままでいてちょうだい」
「…それより試合は…試合はどうなって…」
安里はあの試合のことを思い出して涼音先生に聞くが、急に黙り込んでしまうのであった。
「安里…お前、あの事故のせいで実は…左腕を骨折したらしいんだよ」
「しかも、もう二度とボクシングできないって…」
「…嘘だろ？」
「こんなのを聞きたくも言いたくもないんだけど…本当だって…」
突然出た言葉に安里は絶句した。
たった1人の恨みから引き起こした事故は、安里の人生全てを破壊したのである。
「ふざけんなよ…それじゃあジムが…！」
「残念だけど…もう解体が始まってるのよ。貴方が意識を取り戻す5時間前から既に…」

時はすでに遅し。親父の形見とされていたジムはとうとう廃止されてしまい、彼は絶望した。

「なんでだよ……なんで…なんでこうなったんだよぉっ！！！」

安里は叫びながら体を揺らす。

「安里君、落ち着いて！！！」

「早くナースコールを入れろ！！」

涼音生成は止めに出て、部員達はナースコールのボタンを押して呼び出しにかかった。

「畜生！！畜生ぉ！！！ちくしょぉぉぉ！！！うあああああああああああああっ！！！！！！！」

５時間も経って目を覚ました安里の怒りのたけは続き、部員達が帰ってから１０分ほどでようやく静まった。

窓を眺め、沈んでいく夕陽を見ている時に誰かが病室へ入ってくる。

「ごめんね安里君、また来ちゃって…」

涼音先生だ。先生は安里の隣に置かれた椅子に座る。

「安里君がこの勝負を負けたくないとの気持ちは分かってたわ。仕方ないもの、あんなことが起きるなんて…」

「……」

顔を向かずにいた安里に、先生の話は続く。

「けど安里君。貴方はこれまでのことで不満を持ってたのかもしれないけど、実は5日も前から関わりがあったの。今回の事故も全部…」

「…？」

安里はその言葉にようやく顔を向けた。

「こういうことを言えば当然、安里君は怒るでしょ？分かってるわ」

「…何を言ってるんだよ…？」

安里は理解できず、先生は病室の扉に向いて声を掛けた。

「入って来ていいわよ」

その声に扉が開き、また誰かが入って来た直後に安里の顔が変わる。

「お前は…！」

緑と黒の服装に背丈の小さい緑髪の少女…碧子だ。安里は碧子を見てあの事を思い出すのであった。

涼音先生が可笑しくなり、安里の意識が失いかけたあの時に…。

「4日前の貴方が眠っている間に、彼女から事情を聞いたのよ。私に憑りついた正体、イマジンのことも全て話してくれたわ」

「イマ…ジン…？」

訳が分からないその言葉を聞いた安里だが、碧子は安里に近寄って話し始めた。

「想像って分かるでしょ？私達は童話の空想から生まれた怪物…そ

して、貴方達よりもはるか未来からきた者なの」
「怪物って…ふざけんなよ、お前人間の姿をしてるんじゃ…」
「ううん。これでも私は、あくまでハーフと思えば分かるわ。それに証拠だってあるの…」

「安里。その腕を治したかったら、私と契約してくれる…？」

（つづく）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7828p/

仮面ライダーゼロノス　～スタート・ザ・ラブトレイン～

2011年10月9日18時06分発行